キャベツの安定供給、解決策は

青果育種研究会　種苗会社見学会・シンポジウム開催

青果卸売会社と種苗会社で組織する青果育種研究会（会長＝宮本修・東京青果専務、会員＝卸34社、種苗34社）は、「東海地方キャベツ育種会社見学会」を開催し、東京、大阪、名古屋、福岡などの卸8社、産地、メーカーの関係者が愛知県、静岡県にある種苗4社の農場を視察した。各社が推奨品種を紹介し、参加者は品質などを確認した。また、浜松市内で、各地の種苗会社関係者が加わりシンポジウムも開催。市場取扱量1位のキャベツは、市場関係者にとって重要品目であり、小売店にとってもセールの目玉になる「顔」として位置付けが高い。さらに、近年増加する業務・加工向けにおいても、メニューの汎用性が高いキャベツは欠かせない商材だ。しかし、周年の安定供給、とくに3月～5月頃は業務・加工用としてニーズの高い寒玉が栽培しにくく出回りが少なくなっている。シンポジウムでは、こうした時期に対応した育種、年間安定供給のための産地間連携、消費拡大策などが課題に上がり、活発に意見交換を行なった。

加工・業務用　産地間の連携必要に

シンポジウムでは、群馬県・JAつまごい村の黒岩晋営農課長とオタフクソース（広島市西区）の松本重訓お好み焼館館長がそれぞれの取組みを説明。

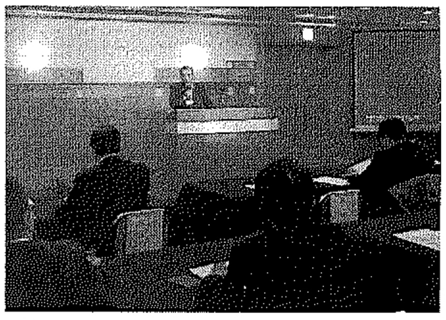
夏秋キャベツの大産地であるJAつまごい村では、密植栽培に取組むことで単収アップを図っている。2012年の出荷量は約190万ケースだったが、200万ケースをめざしているという。こうした産地の特性から、求める品種について黒岩課長は「揃いが良いことが第一条件。産地が生き残るにはもっと力をつけて作っていかないと。いかに実需者に使っていただけるかが重要」とし、今後も契約取引を増やしていきたい意向を示した。

オタフクソースでは、お好み焼きに欠かせないキャベツについてもっと知ろうと10年に13・6㌃の農場を市内に開設。新入社員が研修の一環として栽培に取組んでいる。また、キャベツの糖度が低下しがちな夏場においしいキャベツを顧客に提供できるよう、試験栽培も実施。品種の選定や、糖度を上げる保存方法の研究などを行い、ブランド化を図りたい考えだ。

意見交換では、3月～5月の生産体制について、種苗会社からは「この時期寒玉は栽培しにくい」とした一方、「各社で優れた品種が開発されてきている」などの声が聞かれた。これらの時期も含めた周年の供給体制について、産地からは「（加工・業務筋に向けた）輸入の増加に危機感を抱いている。産地連携による供給体制の構築が必要」との提案もあった。

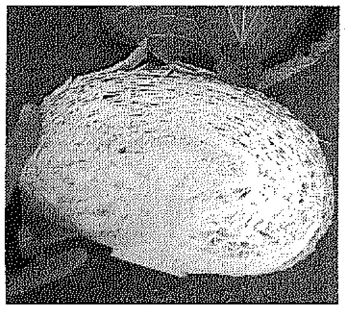
また、少人数世帯の増加などで消費低迷を懸念する声も。メーカーからは「千切りを中心にカットキャベツが好調で、生産が追いつかない」との報告があった一方、「消費者に対して産地も食べ方提案をしていくことが必要」（JA）、「京阪神では8玉での玉売りを推進している」（卸）などの声が上がった。

宮本会長は「業務・加工需要が伸びていても一般消費者を無視できない。民間の調査で、消費者が（野菜全体の）価格の高低を判断する品目としてキャベツがトップになったという結果があり、家庭でも重要な野菜となっている。どのサイズが適切かなど考えて対応することが必要」とした。


「農家にとって単収は大事」と黒岩課長

品薄時の寒玉系も

野崎採種場


愛知県知多郡の農場（上）低温肥大性のある「強力まどか」

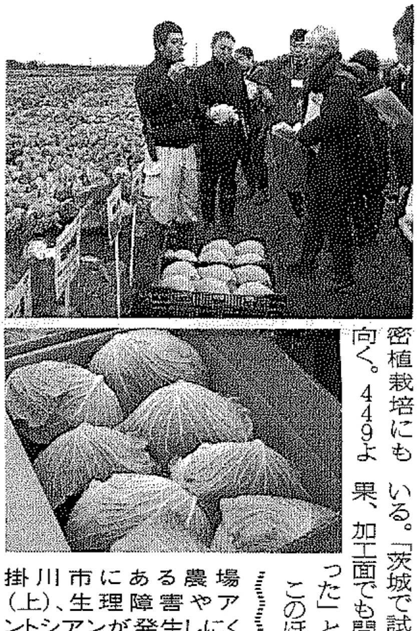
明治時代わが国で最初にハクサイの栽培育成に着手したという野崎採種場（本社＝名古屋市中川区）では、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー、ハクサイなどを専門に育成している。

見学会では市場性の高いキャベツ品種として8種類を紹介。このうち一般平暖地で12月中旬～3月どりができる寒玉の「冬まどか」は耐寒性・低温肥大性のある品種。光沢のある鮮緑色で、切ったときの断面も鮮やか。葉が薄くしまっているので、カットした際にボリュームが出る。2月～3月どりの「強力まどか」（写真下）は冬まどかの性質を持ちながら大玉になる品種で揃いが良い。

また、2月～3月どりで強力まどかより耐寒性を強くした「冬武将」は、葉が厚く重量のある寒玉系品種。冷え込みの強い地域でもアントシアンの発生や、霜による葉焼け、凍結による腐敗が極めて少ないという。寒玉系晩生品種で注目されたのが、在圃性の高い「冬のぼり」。明るい青緑色で重量感があり、耐寒性が高いが湿害にも強く、栽培管理がしやすい。一般平暖地で8月中下旬の播種で、4月中旬以降の品薄時期に収穫が可能となる。

「スイートらら」でリレー

サカタのタネ


掛川市にある農場（上）、生理障害やアントシアンが発生しにくい「冬藍」は甘いと好評。下は愛知県のJAとよはしが提供

サカタのタネ（本社＝横浜市都筑区）では、春系品種として暖地で1月～2月どりの「KI-449」、2月～3月どりの「SK8-448」を紹介。449は低温期にアントシアンの発生が少なく、低温肥大性に優れ安定栽培が期待できる品種。また、外葉が小さく密植栽培にも向く。449より耐寒性を強めた448は肉厚でジューシーな食感。熟期が遅くL玉で出荷できる期間が長いなどの特性を持つ。

また、5月どりが可能な品種として、「SK7-705」を紹介。裂球や腐れが少なく、在圃性にも優れている。「茨城で試験した結果、加工面でも問題がなかった」という。

このほか、平玉系の「新藍（しんらん）」（11月～12月どり）は、萎黄病抵抗性、黒腐病と根こぶ病に耐病性のある品種。

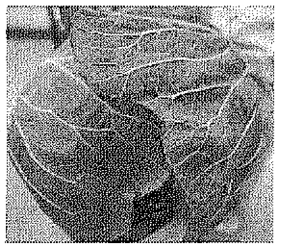
「冬藍（とうらん）」は12月半ば頃の急な低温乾燥の中でも育ちやすい。低温での肥大が良く業務・加工用にも向き、JAとよはし、JA全農ちばの12月～1月どりで導入されている。甘みがあり試食した参加者からは「甘い」「おいしい」との声があがった。

この2品種と、高温期に栽培しやすい「藍天」の3品種はみずみずしくて食味もよく、同社では「スイートらら」シリーズと位置付け。この3品種のリレーを提案している。

加工にも適した「松波」

石井育種場

石井育種場（本社＝静岡市駿河区）では、キャベツ、ハクサイ、ハボタンを専門に育成する。昭和50年代に育成した「松波」は、球底部まで青く、球内部は黄芯系。生食にも加工業務用にも適していることなどから、今も人気が高い。また、昭和60年代に育成した中間タイプの「あまだま」は糖度が12度になることもあり、食感も良いことからスーパーなどで差別化品種としての取扱いもある。


春系品種では耐寒性が強い

このほか、春系では「YR春いろ」（写真上）は萎黄病（YR）に強く、暖地では1月～3月中旬、中間地で12月～1月どりに適した品種。「春系は店頭で白っぽく見える」との声に応え、寒玉の血を濃くしたことで、従来の春系よりも濃緑色に。球内部を淡黄色とし、鮮度感が出るようにした。愛知県を中心に導入が広がっている。

また、寒玉が品薄となる時期に対応し、2月～4月どりに適した寒玉の「青龍345」を紹介。厳寒期の耐寒性に優れ、春先の芯の伸びが遅いなどの特性を持ち、「静岡ではゴールデンウィーク明け頃まで圃場に置くことができた」という。葉は厚く濃緑色で、糖度が高くなる。

3.3㌃ の静岡市葵区の農場

「甘いキャベツ」シリーズも

増田採種場

増田採種場（本社＝静岡県磐田市）では、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー、メキャベツ、ケールなどを専門に品種開発を行っており、「プチヴェール」は同社が開発した新顔野菜だ。業務・加工用キャベツでは、葉が大きく、枚数が多く、中肋（かたい繊維部分）が少ない、葉柄が薄いなどの特性を備えるよう注力している。

業務・加工用に適した寒玉品種では、2㌔～3㌔に肥大し省力・機械化栽培に適した「YR冬太郎」（12月～1月どり）、玉色が濃く1・5㌔前後で収穫できる「YR銀次郎」（1月～2月どり）、生育旺盛で在圃性の高い「冬系583」（2月～3月どり）、在圃性が高く、耐寒性が強い「晩抽冬982」（3月～4月中旬どり）などを紹介。

一方、「甘いキャベツ」もシリーズ化。「とくみつ」は葉がサクサクとし、厳寒期には糖度が12度前後まで高くなり、地域のブランドキャベツとしても使用されている。寒玉の「ふゆみつ」は厳寒期に糖度が上がり、加工・業務用に適している。ボール系の「ひめみつ」は年内から収穫できる品種で、漬物にも向く。

磐田市の農場。プチヴェールなども栽培